

## 東日本大震災 復興への祈りとあゆみ



黒住宗道  
WCRP 日本委員会評議員  
黒住教副教主

NGO ネットワーク) という諸宗教の仲間がおりまして、その仲間たちと13日から街頭募金を行いました。最初の5日間は、岡山でも尋常ではない緊張感があり、緊迫した恐怖心の中で、驚くほどの募金が寄せられました。また、私たちのパートナーでもある国連認定医療NGOのAMDAが地震発生直後から被災地に入り、その第二部隊として我々の仲間入り、その第二次部隊として現地の若き僧侶が調整員として現地入りしたので、彼の読経に時刻を合わせて一緒に祈りを捧げました。

5日を過ぎた頃からは、恐怖の中にあつても少し落ち着きが見られる中で、街頭募金を行う難しさを感じるようになりました。『街頭集金』にならないように、例えば歩道の両脇に立たないとか、大きな声は出さないとか、少人数に分かれて立つとか、最大限の配慮をしましたが、被災地から遠く離れている私たちからすると、それは「諸宗教による街頭での祈り」そのものでした。「少なくとも1ヶ月は続けよう」と、4月12日まで連日、皆で交代してつとめました。終わり頃はほとんど募財にはなっていない感でしたが、「被災地は、これからが大変です」と、道行く人たちや、信号待ちする人々に静かに声を掛け続けました。

西日本では実感を伴った揺れを知りませんし、放射能汚染の恐怖も正直なところ我が事になっていないように思いますが。あまりにも遠すぎて、被災地と綿密な連絡も取れません。個人の力には限界がありますが、そうした意味では、私たちのような宗教教団には教団組織というネットワークが元々あり、さらにその教団同士の連携であるWCRPのネットワークやRNN、また、AMDAなどの他のNGO/NPO団体とのネットワークを活用することもできます。

私たちのことを申し上げれば、AMDAの支援先に寄り添う思いで、『わがま』を聞いてあげられる存在でありたいと思つています。お金や物を送るだけが救援ではもちろんありませんが、「こういうものがあれば助かるんだけど：」「ああ、それくらいのものだったら、買って送ってあげられるから：」というやりとりが出来るのは、信頼があればこそだと思います。当然、出来ないことは出来ないとはつきり言いますが、「遠く離れてはいるけれど、『わがま』を聞いてくれる人たちが岡山にいる：」と思つてもらえる存在でありたいと願つているのです。

### 【畠山師】

私も、同志社大学でシンポジウムに参加しておりまして、途中、上を見ましたら、シャンデリアが揺れていました。空調の風で揺れるのかなと思つていましたら、スタッフが急いで会場に入ってきて、「大変なことが起きています」と言つて：。思えば、少し揺れたのだと思います。テレビ画面を見てビックリいたしましたし



畠山友利  
WCRP 日本委員会評議員  
WCRP 日本委員会事務次長

て、大変なことになるなということと、そして、もう一つ、福島には原発があったなということをすぐに思いました、このことはどうなっているのかな、まず、早く事実確認をしたいなという思いでした。

当日は帰ることが出来ませんでした、翌朝の新幹線で事務局に戻りました。事務所のドアを開けてみたところ、キャビネットのいくつかが倒れておりまして、相当な揺れだったということを実感しました。

また、数日後だったと思いますが、原発の問題により、今後どのようなことが起きてくるのか、また、皆さんにこのこ

とをどのようにお伝えしていけばいいのかということが心配でしたので、科学技術ご専門の平和研究所の佐藤先生にお会いして、お話を聞かせて頂きました。これが始まりだったかなと思います。

特に、事務局の立場ですから、事態がどうなっているのかということと同時に、このことをどのように受け止めていけばよろしいのか、また諸宗教という一つの連合体として何をしていけるのかということが、頭をよぎっていました。事務局では、あの直後に調査隊を派遣しました。私自身は3月末あたりにニューヨークで国際委員会が行われたので出席し、日本が置かれている状況を報告いたしました。CNNやBBCなどのメディアで世界中に伝わっていたのは当然ですが、世界各地から集まった役員の皆さんから本当に我が事のように心配して頂く、会う方会う方から「大丈夫か」という言葉を頂いて、会合の中でも、そうした皆さんの励ましというか、そんな場面があつて、WCRPの国際連帯というのは家族というか、そういった一体感を強く感じさせて頂きました。また、その時

に、「すぐにでも、世界的なネットワークとして、何らかの形で日本に支援の手を差し伸べたいので何でも言ってくれ」と、励ましも頂きました。日本に戻った直後、いろいろな支援体制を考えていくために、国際委員会と韓国、KCRPから調査隊が入りました。新宿で打ち合わせをしている最中に余震があり、彼らも非常に驚いていました。

そんなことで始まったわけですが、国際連帯ということで、今すぐにでもボランティアとして飛んできて、何かお手伝いをさせて頂きたいという、そのことは強く感じましたが、当時は、日本がまだ混乱している最中でしたので、その場はもう少し待つて頂くことになりました。

(次号に続く)

震災復興キャンペーン2012年

「テーマ」

「東日本大震災をけっして忘れない」  
ための祈りと行動

「方針」

- ①「失われたいのち」への追悼と鎮魂
- ②「今を生きるいのち」への連帯
- ③「これからのいのち」への責任